

# タチウオ卵の出現と海況の関係について

水産試験場

## 研究のねらい

和歌山県におけるタチウオの漁獲量は 2000 年以降急激に減少し、2003 年には 1992 年以降守っていた漁獲量全国一位の座を明け渡すこととなりました（図 1）。ここでは 1980 年以降のプランクトンネットによる調査におけるタチウオ卵の出現状況を明らかにして海況との関わりを検討し、漁獲量急減の要因について推察しました。

## 研究の成果

- ① 1980 年代と 1990 年以降をわけて卵出現の季節的变化をみたところ、1980 年代は出現ピークが秋季にある年が多く、分布の中心が期間をとおして紀伊水道にありました。1990 年以降は出現ピークが春季にある年が多く、分布の季節的变化が春季＝紀伊水道外域、夏季＝紀伊水道、秋季＝紀伊水道外域というパターンを示しました（図 2）。
- ② 前述の卵出現パターンの違いは、春季における紀伊水道外域の水温が要因であることがわかり、春季の水温が高ければ産卵のピークを春季に迎え、低ければ夏～秋季にずれ込むといった傾向となりました（図 3）。春季の水温は一般的に黒潮の離岸時は低水温に、接岸時は高水温になる傾向があり、1980 年代が離岸傾向（低水温）、1990 年代が接岸傾向（高水温）となっています（図 4）。
- ③ タチウオの卵出現パターン、つまり親魚の産卵生態は海況（黒潮の離接岸）に大きな影響を受けることが明らかとなり、近年の漁獲量急減は 2000、2001 年の黒潮離岸（低水温）により産卵場の形成が悪かったことが要因の一つとなっていることが考えられました。

## 成果の活用面・留意点

プランクトンネットから得られるデータは資源の動向や産卵・回遊生態などの把握に役立てることができる貴重な情報です。近年の漁獲量減少は海況が要因の一つと考えられましたが、その他に 1999 年以降の魚価上昇による漁獲圧の増加、産卵期前の親魚の多獲など、複数の要因が重なって起こったものと考えられました。

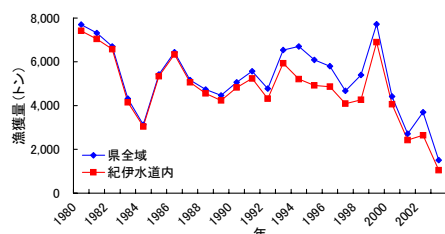


図 1 県内におけるタチウオ漁獲量の経年変化

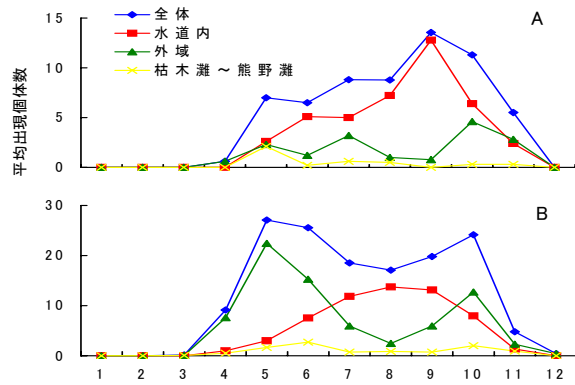


図 2 卵出現の季節的变化  
A ; 1980-1989 年平均, B ; 1990-2004 年平均

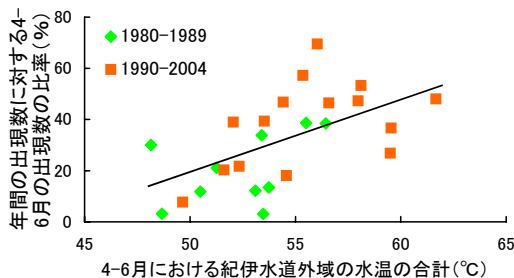


図 3 4-6 月における紀伊水道外域 (50m 層) の水温の合計と卵の出現比率の関係

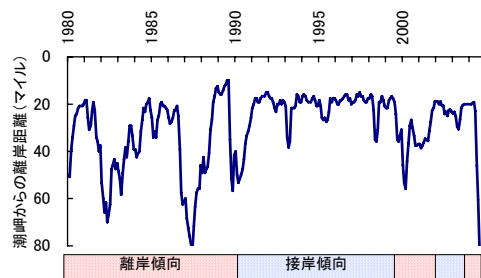


図 4 黒潮流軸の潮岬からの離岸距離の経年変化

(問い合わせ先：0735-62-0940)